

The Mentality behind English Communication Style

—英語でのコミュニケーションとメンタリティ—

井上 卓

1. はじめに

日本の英語教育でコミュニケーション能力の育成の必要性が叫ばれて久しい。私自身ALTをはじめとする多くの英語国民と色々な機会でもコミュニケーションしてきたが、よく感じるのは、彼らが確固とした自分の意見を持ち、論理的に自己主張をしていくということである。こちらがしっかりとした考えをもたず、少しでもあいまいな話し方をすると、相手に突っ込まれてしどろもどろになることになる。これは、日本人が英語国民との会話でよく経験することだが、これには何か双方の精神構造の大きな違いが関係しているのではないかと、思うようになった。たとえば、欧米人は自我が確立しているのに対し、日本人は自我があるのかもはっきりしない、ということなどである。日本人にとって、英語でコミュニケーションするのが難しいのは、大きく異なる発音、リスニングの難しさがあげられるが、それ以外にこういったメンタル面の原因が大きいように思われる。このレポートでは、さまざまな資料にあたって、そのことを明らかにしたいと思う。そして日本人が英語でより良くコミュニケーションできるようにするには、具体的にどうすればいいか、を考えてみたい。

2. 意識構造の違い

英語のselfとは「自己、自我、自分、自分自身」の意味であるが、日本人は自己主張をしないので自我が確立していないと言われたりする。一方英語国民は利己的と言えるほど個人主義的で自己主張をする。これは自己の確立を促す教育の影響も大きいと考えられる。たとえば、アメリカの教科書には自我の確立をテーマにしたものが多い。ここに「私が私であることは、うれしいことだ(I'm Glad I'm Me.)」^①という小学校の教科書にある詩がある。

誰も、私の見方でものを見ない。

誰も、私の行く道を行かない。

誰も、私のような遊び方をしない。

誰も、私のように話さない。

誰も、私のいうようなことはいわない。

私は、これまでそれに気が付かなかった。

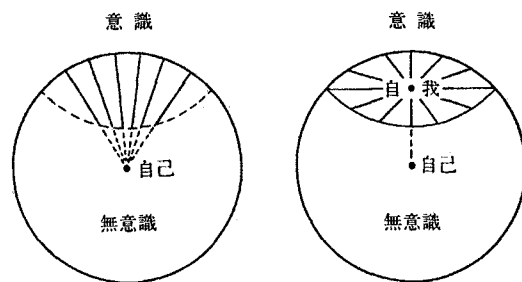
私は、特別なんだ(I am special.)。

私は、私だ(I am me.)。

私は、私の他の誰にもなりたいとは思わない。

アメリカ人は子供のときから「強い個人」として育てられる。「強い個人」は、まず、自我の確立から始まる。自分が自分であることを明確に意識し、他者の人格を尊重する、のがテーマである。この詩にある「私は、私だ(I am me.)」という表現は、アメリカの子供たちがよく使うと言われる。アメリカをはじめとする英語国では、自我の確立は早ければ早いほうがいいとされている。一方、日本人は自己主張に乏しく、西洋人からは一体自我があるのかと思われがちである。

西欧人は自我が強く、日本人は自我が弱い、とよく言われる。臨床心理学者の河合隼雄は西洋人と東洋人の心の構造^②を次のように図示している。



日本人の意識

西洋人の意識

この図には、次のような説明がされている。

この図式に従って説明すると、西洋人は自我を中心として、それ自身1つのまとまった意識構造をもつ

ている。これに対して、東洋人のほうは、それだけではまとまりをもっていないようでありながら、実はそれは無意識内にある中心(すなわち自己)へ志向した意識構造をもっていると考えられる。ここで、自己の存在を念頭に置かないときは、東洋人の意識構造の中心のなさのみが問題となり、日本人の考えることは不可解であるとされたり、主体のなさや、無責任性が非難されたりする。

私は、つねづね、ALT(外国語指導助手)をはじめとする外国人との英語でのコミュニケーションを通して、「欧米人の自我は我々とどんなふう異なるのだろうか」という疑問を抱いていたが、前ページの図は深層心理学的なものだが、とても興味深い。欧米人は自分というものを意識的に確立していて、はっきりと自分を主張する。日本人は意識と無意識の境界も定かでなく、自己の客観的な認識ができていないので、自我が不安定で自信のなさ・自己主張のなさにつながってくる、と考えられる。

3. 動く自己と動かない自己

3-1 人称について

日本人が学校で英語の「人称」について習うとき、I, my, meの表や「1人称・2人称・3人称」の用語を教えられるくらいである。しかし、「人称」は英語でのコミュニケーションで重要な意味をもっている。もちろん、1人称は話し手、2人称は聞き手、3人称はその場にはいない人や物のことであるが、どの人称であれ、すべての英文の背後に“I”がいる、ということである。たとえば、He has a nice bike.という文は、I know he has a nice bike.ということを表している。すべての英文は人間によって話され書かれるものである以上、その背後には“I”がいる。英語という言葉は常に自分と他者(Iとyou)をはっきり区別して発話される。英語国民がIと言うとき、自分の存在を意識主張し、youと言うとき、相手にしているのは自分の存在価値を主張している他者である。英語の人称はこのように峻別されて用いられるが、これには西欧人の自我の確立と関係があると思われる。一方、日本語の人称の使用は英語とかなり異なりあいまいである。1人称の代名詞が2人称の代名詞として使われたりする。たとえば、「ワレは何言っとるんや」と言ったり、「おのれ」も1・2人称

両方に使われたりする。このように、人称が交替する現象は、日本人の自我が弱い(確立していない)ために起こると考えられる。

3-2 動く視点と動かない視点

英語表現の特色の1つに、話者の視点が固定されている、したがって間接話法が多用される、時制の一致も行われる、がある。一方日本語は話者の視点が移動するので、直接話法が中心であり、時制の一致もない。次の例を見てみよう。

アンは私とそのケーキを買うわと言った。

Ann said she would buy the cake.

文中に「私」が出てくるが、日本語では「私」=話者とは限らない。文脈で判断するしかないわけで、もちろんこの日本語の仕組は「アンは『私とそのケーキを買うわ』と言った」である。外国人はこんな日本語に困惑してしまう。“I”は常に話者を指すので、この「私」とはだれを指すのか混乱してしまうのだ。この文では視点が移動している。つまり「アンが」と言った瞬間「アン」に視点に移ってしまい、アンの立場から見えてしまい、「私が買うわ」となってしまう。日本語の発想に近づけて、直接話法でAnn said, “I will buy the cake.”とももちろん言えるが、会話ではあまり言わない。「視点の固定した」英語国民は、必ず間接話法に直して、全部自分の視点から統一して表現する。時制もAnn saidと言った時点で時制を過去に固定してしまう。そして従属節の時制を調節する。このように英語では話者の視点が動かないが、日本語では視点が流動的で人称の使用も厳然と区別されていない。視点が動かないということは、自己あるいは他者を客観的に冷静に見つめることであり、確立された自我の存在を感じる。このことから、英語国民の自己(自我)は磐石のようにどっしりと動かないが、日本人の自己(自我)は動く、ということが言える。

4. モノログ言語からダイアログ言語へ

英語が本質的にダイアログ(対話)なのに対して、日本語はモノログ(独り言)だと言われる。次の例¹⁾を見てみよう。

Paul: Hi, Taro. Good to see you. How are you today?

Taro: Well, we have had a strange weather. You are busy as always, aren't you?

I am OK, but my asthma is bad at this time of year.

太郎の答え方はどこかおかしい。How are you today?と聞かれたのに天気の話で始めているので質問と食い違っている。後のほうで体調を述べているが、相手ははぐらかされた感じでイライラするかも知れない。太郎の返事は日本語的発想からきたもので、英語では次のように言うだろう。

Paul: Hi, Taro. Good to see you. How are you today?

Taro: I'm OK, thank you, Paul. But I don't like this kind of weather, you know. It's bad for my asthma, particularly at this time of year. How are you doing? Busy as always, aren't you?

このように答えると、会話がつながって、言葉のキャッチボールになる。英語の対話は常に相手を意識して、相手の言葉を受け止めてつないでいく。アイコンタクトも必要になる。英語はダイアログの言語だということがわかる。これに対して、日本語は相手を想定しないモノログ(独白)の言語である。

コミュニケーションのスタイルは、日本人と欧米人で大きく異なる。坂本ナンシーら²⁾は欧米流の会話をテニスのゲームにたとえている。双方が球を交互に、それも違う位置からいろんな球種の球を打ち合うように、生き生きとした変化のあるやり取りを楽しむのである。日本人の会話スタイルは、これと全く異なっていて、ボーリングにたとえている。球を投げる順番は年上か年下か、あるいは目上か目下かで決まっている。自分の番が来たら、(言葉の)球を注意深く投げる。他の人は礼儀正しくそれを見守る。沈黙のうちに、皆がその人のスコアを記録し、次の人の番になり球を投げてゲームは淡々と続く。そこには何の言葉のやり取りもなく、緊張もない。(言葉の)球を一方向的に黙々と投げるだけである。これらの例は、話し手と聞き手が言葉のやり取りを楽しむ西欧人と、相手構わずモノログ的・形式的にしゃべる日本人との特性をうまく表している。

日本人が外国人相手に「英会話」をするとき、習った語句や会話パターンを機械的に一方向的に使うことが多い。日本人の英語での会話のこういった側面をついたものとしてダグラス・スミスの評論³⁾の一節を見てみよう。

五年前のある大晦日の真夜中、私は、金沢の寺の境内で、大きな鐘が鳴らされているのを聴いて立っていた。冬の最初の雪は数時間降りつづき、新年はまったく新世界として、白く幻想的にその姿を現していた。私が巨大な鐘の荘厳な響きに耳をかたむけていると、1人の男がやって来てたずねた。「すみませんが、英語であなたに話してよろしいでしょうか」複雑な考えが私の心を充たしたが、私は「もちろんですよ」というほかなかった。それから彼は、お定まりの質問のリストをあげせかけた。「どこから来たか」「日本にどれくらいいたのか」「金沢で観光旅行をしているのか」「日本食を食べられるか」「この儀式がどういうことかわかるか」

彼の質問は、儀式のムードから私を押しつけ、鐘の響きから、冷たい空気の香りから私を押しつけ、「鎖国」の浸透不可能な壁の向こう側にまで押しつけてしまった。

彼の言葉は、「I have a book.」と同じくらい、状況にかなっていなかった。彼が言ったことはすべて、真実私に向けて言われたのではなかったし、彼はその答えに真実興味をもっていたわけでもなかった。彼はまったく私に話しかけたのでなく、私の存在がたまたま彼に思い出させた外人という、彼の心のなかのステレオタイプに話しかけたのであった。私に話しかけていたのは、彼自身でもなかった。彼が暗唱した文章は型にはまったお定まりで、その文章と彼自身の性格、考えや感じ方との間に何らかの関わりがあると信ずるのはむずかしかった。それはむしろ、二つのテープ・レコーダーの間でなされた会話であった。

ついに彼が去り、私が不快がっているのをながめていた他の男がやって来て、やさしくほほえみながら日本語で私に言った。「ああいうふうには英語をしゃべる日本人は、日本のことを知らないんだから、あまり聞かない方がいいよ」私はとてつもない感謝の気持ちでいっぱいになり笑い出した。鎖国の壁はふたたび取り払われた。

約25年前に書かれたダグラス・スミスのこの評論は、今日でも日本人の英会話の本質的な問題点を正確に突いている。学校ではOral Communicationの科目が設置されて久しく、ALTの数も飛躍的に増えた、といっても、今日でも相変わらず日本人の英語

の会話は、相手を想定しないようなモノログ(独り言)が多い。たとえば、最近筆者がALT対象に行った調査³⁾では、JTE(日本人英語教師)との対話の挫折が起こる理由の1つに、日本人教師のindirectで独り言のような話し方をあげている。

これまで日本語がいかにモノログ的かについて述べてきたが、英語という異文化とのコミュニケーションでは、ダイアログ言語が必要になってくる。自我が確立した英語国民は論理的に自己を主張してくる。自分たち日本人は、心をオープンにして相手との平等感覚をもち、積極的に自己主張をして言葉のやり取りを楽しむべきである。こうすれば、それは自我の強化・確立に大きく結びつくはずである。

5. 考察

5-1 self-esteem(自尊心)

ALTをはじめとする欧米人と対話すると、彼らが自分を信じ、人生は自分で作っていくんだという強い意志をもっているのを感じる。彼らは自分の考えや要求を積極的に口に出す。彼らのこの自信や自己主張はどこから生まれてくるのだろうか。

個人主義の発達した英語国では、個性と独立心が尊ばれ、自己主張は積極的な自信の現れとされる。対照的に、集団主義の日本人は個人よりも集団の「和」に重きを置くので、自我を殺して自己主張が弱くなる。英語国民と日本人の自己主張の度合いの大きな相違は、self-esteem(自尊心・自負心)の強さ弱さから来ていると思われる。2. で述べたように、アメリカでは自己の確立を促す教育が重視される。自己の確立は、他の人に自分の価値を高く評価されることから自信となり促される。アメリカ人の先生は実に生徒をよく褒める。Well done! Good! など英語の褒め言葉は100もある。生徒の長所を見いだし、それを伸ばすという考え方はアメリカ等の英語国で徹底されている。このような教育を受けて成長する欧米人は、強いself-esteemをもち、自然と確固とした自己主張ができることになる。一方、日本の教科書で自我の確立や自己主張をテーマにしたものは非常に少なく、「温かい人間関係の中のやさしい一員」のテーマが多い。これは、「優しさをもつこと、相手の気持ちになることが大切」というねらいをもつが、集団の和を重んじることになり、強い自己主張は疎んじられることにもなる。また自分の価値を

認められるという点で、日本では、先生が生徒をしかることが多くても褒めることは少ない。学校だけでなく友人や家族どうしても直接相手を褒めることは少ない。日本語自体、褒め言葉が英語と比べて極端に少ない。日本人が強いself-esteemをもちにくいのは、このような教育と文化的価値観の影響が考えられる。

結論として、英語国民の積極的な自己主張(self-assertion)、相手に伝えようとする強い意志の背後には強い自尊心(self-esteem)がある。確立した自我をもつ英語国民相手のコミュニケーションでは、日本人は強いself-esteemに裏づけされた確立した自我をもつことが必要である。そのためには、普段から相手との平等感覚をもち(相手の人格を尊重し)、学校でも家庭でもフランクにお互いを褒め合うことが大事である。

5-2 論理性を身につける

日本人は感情的に(emotionally)もの考えるのに対して、英語は論理的に(logically)考えると言われる。英語の対話で必要な論理的な思考(logical thinking)はどうすれば身につくのだろうか。

日本人の行う対話は、4. で見てきたように、相手を想定しない、相手にとって支離滅裂とも取れるモノログ(独白調)のものになりやすい。対人関係で相手に気を遣う日本人は曖昧な表現を好み、遠回しに言う。しかし論理的に話し表現する英語国民には、日本人の「察しに頼るコミュニケーション」は通用しない。中津療子氏は「英語は、自他を明瞭にわかる思考を土台にしている」⁴⁾と述べているが、欧米では、対話は互いに自我が確立し厳然と存在を主張するIとyouの関係で行われるので、自分の意見を論理的・明確に述べ、他者を説得しなければならない。しかし自我が弱く自他の区別が明瞭でない日本人にとって、曖昧さを好む日本語的思考にも影響されて、論理的に英語を話し表現することはとても難しい。たとえば、Charadesというジェスチャーゲームを日本人にさせると、自分は表現したつもりでも、いかに相手を想定していないか、と感じるさせるような独り言的な表現力ぶりをよく感じたり、あるいはShow and Tellで持ち物を英語で説明させると、聞き手にわかりやすい説明がなかなかできない。こういったことから、日本人が日常しっかりした自我をもたず他の存在も考えない、といったモノログ的

な会話をしているのがうかがえる。そこにはジェスチャーまでも含んでのあらゆる手段を用いて相手に伝えようとするダイアログは乏しい。

英語には、意外と内省的な言葉が多い。たとえば I have finally discovered myself. (私はついに自分の進むべき道がはっきりした) や He is collected. (彼は冷静に落ち着いている) 等がそうである。英語国民は、常に自分の心を注意し観察している。そしてこうして確立した自我から対象を分析的・論理的に切り取っているのだ。

結論として、論理的な思考は、我々が英語の表現力を身につけるために必須である。5W1H (だれが、どこで、いつ、何を、なぜ、どうしたか) を使った方法は、英語の構造を把握し、分析力あるいは論理性を身につけるのに有効な方法である。たとえば、英語検定のリスニング・コンプリヘンション・テストに備えた勉強や、Controlled Conversation の練習は、5W1H の分析力を鍛え身につけるのに適している。

6. おわりに

英語でのコミュニケーションと英語国民と日本人の精神構造の違い、このテーマが長く心に引っ掛かっていた。このレポートに取り組んで、英語の特質とか欧米人の心の内部がより理解でき、発見も大きかった。レポートには不完全なところも多いと思う。多くの方に読んでもらい、忌憚のないフィードバックが得られたらと思う。そしてこのレポートが今後の英語教育や各自の英語研修に少しでも役だてばうれしいと思う。

引用文献

- ① 今井康夫『アメリカ人と日本人教科書が語る強い個人とやさしい一員』(創流出版, p.98)
- ② 河合隼雄『無意識の構造』(中公新書, pp.152～153)
- ③ ダグラス・スミス『イデオロギーとしての英会話』(晶文社, pp.32～33)

参考文献

- 1) 長部三郎『伝わる英語表現法』(岩波新書, pp.150～151)
 - 2) 坂本ナンシー・直塚玲子『Polite Fictions』<異文化間の理解と誤解>(金星堂, p.81)
 - 3) 井上 卓『英語でのコミュニケーションと日英語の発想の違い』(和高英研会誌, 1999年度)
 - 4) 中津療子『なんで英語やるの?』(文春文庫, p.71)
 - ・ 大津栄一郎『英語の感覚(上)』(岩波新書)
 - ・ 木村哲也『英語らしさに迫る』(研究社)
 - ・ 荒木博之『日本語が見えると英語も見える』(中公新書)
 - ・ 南 博『日本的自我』(岩波新書)
 - ・ 『現代の英語教育』第8巻 研究社 1978「日英語の比較」
 - ・ 谷本誠剛『物語にみる英米人のメンタリティ』(大修館書店)
 - ・ 加藤恭子/ヴァネッサ・ハーディ『英語小論文の書き方』(講談社現代新書)
- (関西学院大学大学院
言語コミュニケーション文化研究科)